

ろう教育の研究動向と課題の検討 (其の一)

三宅 宗雄*・須永 朝子・内 藤 甫

The tendency of the studies on the deaf-education in Japan
and the discussion about these subjects

MUNEO MIYAKE, ASAKO SUNAGA and HAJIME NAITO

序

ろう児に対する教育には盲児教育にも言われる如く、一般普通児に対する教育に比べて、遥に大きな困難と重い負荷が見られる。

我々は一夏(1956年)、京都府立ろう学校に通い、親しく其の教育の實際に接し、更に校長中先生所蔵のろう教育に関する最近(1950年頃から)の多数研究文献を渉猟する機会を得て、一層其の感を深くしたのである。

先きに根岸²⁰⁾氏は(1954年)ろう教育研究文献目録を、文献の発表年次別に完成し、斯界に多大の便益を与えられたところであるが、我々はこの目録外又は其後の文献を中心に、ろう教育の研究内容を課題別に検討した。

これにより我国におけるろう教育の最近の研究動向を窺い、併せて更に残された今後の課題に就て卑見を加えたいと意図したのである。

敢て先賢各位の叱正を乞うものである。

本研究に多大の御援助を下された京都府立ろう学校の中、藤森両先生並に教職員各位に厚く御礼を申上る次第です。

第一章 文 献 の 整 理

我国における最近のろう教育に関する文献約300編に就て、其の研究を課題別に次の如く分類整理した。

I 基本教育に関する研究

1. ろう教育一般 2. 言語指導

II 教科に関する研究

1. 国語指導 2. 算数指導 3. 律唱指導 4. 図工指導 5. 職業指導

III 聴能教育に関する研究

IV 心理学的研究

V 医学的研究

全文献の約1/2は基本教育に属するものであり、而も其の内、特に言語指導に関するものが最も多くを占めている。(全文献の約1/3)

従ってろう教育に関する研究の動向を知るためには、この言語指導に関する研究を探索する事が大切であると言える。

嘗て L'Epée 氏が言った如く、ろう教育の原理は「我々の精神へ耳を通して入って来るものを、彼等の精神へは目を通して入らしめなければならない」ものであり、ろう教育の困難性はこの目を通しての特に言語教育に在ると言わねばならない。

元来我々の言語発達には、本人が健全聴能者であると共に、其の環境が幼小時から言語雰囲気中に在る事などが必要な条件となっている。

このような条件から外れたろう児に聴覚以外の感覚、特に視覚を通しての言語教育を行わなければならない点に、大きな困難と重い負荷があるわけである。

其の困難が如何に大きなものであるかに就ては、中氏始め多数のろう教育者が常に強調しているところであって、其の困難に打ち克つための努力、工夫が積み重ねられて、研究発表となっているのである。

誠にろう教育においては言語指導に関する研究こそ永遠の課題だと叫ばれる所以が肯かれる。

事実、ろう幼児は発育途上において自己の意思表示を生理的発露としての表情や身振りによる手話で表現しようとする。年長児でたとえ言語教育としての口話法を学ぶも、其の読話、発語の習得困難なため、意思表示や理解の範囲が限局される関係で、矢張り手話に依存しようとする。

口話を体得したろう成人でも口話に中心をおくとは言え、複雑な意思や感情の表現には手話を混じえている状況である。

かくてろう教育では言語指導が最も困難であり、而も重要な部門であるため、多数の研究が見られる次第である。

* 西京大学児童学教室

第二章 基本教育に関する研究

第一節 ろう教育一般

1. 歴史的回顧

我々は新しい研究に入るためには先ず先人の業績を重んじなければならない。歴史的回顧があって始めてそこに新しい課題の意義が生まれる。この点ろう教育にも当てはまる事である。

我国におけるろう教育が科学に基礎をおいたと考えられるのは、福沢諭吉氏(1866年)や山尾庸三氏(1869年)などによる外国のろう啞教育の紹介に始まるものと言う。特に京都で比較的早く(1878年)其の教育施設としての京都盲啞院が開設されている。

明治中期(1890年頃)から全国的に手話法が用いられ、続いて大正中期(1920年頃)に発音法、大正末期(1930年頃)から口話法に重点がおかれるようになって今日に至っている。

終戦後である1948年にろう教育の義務制が確立し、教育の機会均等が認められた事は真に喜びに堪えないところであるが、一般普通児に対する教育に比べて依然教育内容の向上が阻まれていると言われる。

読書能力に対する努力は漸次報いられて来ているが、発語を習得せしめる教育技術が依然進展を見せないためだと考えられる。

尤もアメリカ⁹⁾におけるろう教育の過去50年の歴史でも其の前半はろう児の一方的発語が中心となり、後半になって話し言葉が採り挙げられたのであるが、1930年以降に補聴器や聴力検査の進歩発達と其の普及により、発語指導並に研究が著しく発展し効果を挙げていると言う。

又、一般人のろう教育に対する理解、認識の点でも彼我隔りを見るだけに、我々の学ぶべき点も多いと考える。例えばイリノイ州¹⁰⁾法によれば、3~21才のろう及び難聴者に対し、其の特殊教育としての詳細な運営規定を設けている。早期発見に努めること、児童の適格判定は耳鼻咽喉科医によること、聴力検査は毎年行うこと、生徒が絶えず教師の唇を見る様に坐席をとらしめること、視力疲労を回復せしめるため、随時休憩せしめること、一教師当り15人編成とすること、教員は特殊教育30単位以上を取得した者であること等が挙げられる。

2. 特殊教育と特別教育

ろう教育が義務教育であるからには一般普通児と同じ教育基本方針に従って運営されるものである事は当然ながら、其の特殊教育としての本質的な性格は失われてならない。

藤森⁷⁾氏はろう児の就学率が一般普通児に比べて低調

である事に対し、特殊教育としての理解と積極的な施策を教育行政に打ち出されるよう要望している。

普通児並みの教育では手の届かない面がろう教育では沢山ある。特殊教育としての性格が義務教育の蔭に隠されて消えてはならない。

全国ろう教育研究大会(1951年)において各校の特別教育活動¹²⁾が報じられている。クラブ活動、ホームルーム、生徒会、図書館などの諸活動状況は何れも高く評価されて良い。

田辺¹²⁾氏は社会に遅れ勝ちなろう児の欠陥を補い、彼等の持つ個性を最大限に発揮させ、互に協力する態度や、自発性を促すために、これらの活動が極めて大切である事を述べている。

敢てろう教育に限らない事であるが、すべて教育は一人一人の生徒に浸み渡るものでなければならないと言う事が、特にこうしたろう教育において痛感せられる。

又、新入学生に対するろう教育の教師としての心構えや態度が論じられている中に、私の求める一年生として丈夫で元気な子、何でも熱心に進んでする子、正直なすなおな子と言う一般的な願いが見られる。

これなど特にろう教育の立場から叫ばれて始めて深刻な願いとして聞取られるわけである。ろう児はフラストレーションの気持が強いとか劣等感を持っているとかなどと言われるだけに、こうした一般的な願いが敢て叫ばれる所以もそこにある事を認めなければならない。

又、カリキュラム¹⁰⁾や日々の行事、ガイダンス⁹⁾などに就ても討議されている。荒川¹⁰⁾氏はdaily schedule(日々の指導計画)の必要性を強調し、児童が相談し合う時間、理解のための時間、熟達のための時間、情操を高めるための時間、創造的表現のための時間、レクリエーションのための時間、課外活動のための時間、反省及び跡片付のための時間などを織込むべきであると主張している。

3. 考 察

ろう教育を更に一段と向上発展せしめるためには、尚、多くの課題が残されている。

先ずろう児の早期発見と早期からの教育開始の問題である。例えば幼児に対するろう教育の場として特別クラスの外に保育学校や特殊幼稚園の如き保育、教育の施設を設ける事である。ろう教育は義務教育としての小学教育を待たずに幼児教育から取組むべきである。年令が一年でも低い時期からの教育がより以上の効果を挙げ得るものと考ええる。

一府県一カ所の教育施設では義務教育としての恩恵に浴する地域的範囲に限られる。而も一カ所の施設に小・中学部に小人数収容の幼児部が設けられている程度では、

普通児の場合に比べて全く狭い門戸、短い経路でもあり、又、高校、大学への一貫した教育組織が認められていないため、向学心を満足せしめ得ない憾みもある。

更に義務制と共に、入学者の増加は個人指導に重きをおくべき口話法の指導、習得など益々手廻りかねる事となる。職員と施設の充実強化が望まれるところである。

補聴器その他感覚刺激に役立つ発明、改良などの推進、大学とつながるろう専門診療所若しくは指導相談所の設置(医学、心理学、教育学等の専門的分野よりの客観的な調査、診断、治療、指導等を行う)なども必要な事である。又、高学年生には各人が他人の立場を理解し、社会生活に適応出来るように導くため努めて一般青少年グループとの交流参加の機会を与える事である。

遅進ろう児(明らかに精薄児と考えられる者の外に性格的問題児も含む)対策も考慮されなければならない。

更に広く社会の人々にろう教育の本質をよく認識せしめて、それらの協力を求める事も必要である。所謂西洋式ろう教育施設が出来て80年、ヘレン・ケラー氏の三重苦の奇蹟が伝えられて30年を経た今日、未だろう教育が隔絶した存在と思い誤られている事を聞いて一層このP.R.活動の緊要さを覚えるものである。

殊にろう児を持つ家庭の保護者にろう教育の重要性や在り方を講習会や通信講義、学校見学、啓蒙映画等を利用して理解を深めしめる事も喫緊の事である。上野¹⁰⁾氏は特に3才以下のろう児家庭の親の指導を取り挙げているのも当然の事と肯ける。

主な参考文献課題

1. 日本におけるろう教育
2. 我々は正しい軌道に乗っているか(グリーンナウエイ)
3. ろう及び難聴者に対するイリノイ州法
4. ろうあ教育に対する所見(中)
5. 特殊教育を如何に振興するか(長崎教職組)
6. 特殊教育の一環としてのろう児の教育とこれを推進するもの(土屋)
7. 特殊教育行政における2.3の問題(藤森)
8. ろう学校におけるDaily Scheduleの編制の基礎(荒川)
9. ガイダンスのための基本的考慮(今野)
10. 教科課程と教授資料の計画と活用について(川口)
11. ホームルームについて(安藤)
12. 特別教育活動の実際(田辺)(飛田)(豊島)(古川)
13. 幼ろう児教育指導体系試案(大谷)
14. 新入生の取扱い「当初の記録」(佐藤)
15. 入学一年生の取扱いについて(加藤)(菊池)(佐藤)(寺

師)(玉井)(実尺)

16. 中学部における学級経営の諸問題(矢野)(小倉)(高橋)
17. 学級経営の反省と今後の歩み(吉田)
18. 新しい学級経営のあり方(久米田)
19. 3才以下のろう児の家庭指導(上野)
20. ろう教育研究文献目録(根岸)

第二節 言語指導

ろう教育における重要学習である言語指導に関しては最も多数の研究発表が見られる。これらの文献を次の分類に整理、検討した。

- | | |
|-----------|----------|
| 1. 言語指導一般 | 4. 感覚訓練 |
| 2. 読話と聴話 | 5. 音韻 |
| 3. 発語 | 6. 語彙と文型 |

1. 言語指導一般

言語が人間の生理的欲求に基く身体的表現から始まり次第に具体的、象徴的な成長の道を辿って来たものとして、根岸¹⁾氏はろう語の本質に就て述べ、聴覚性言語表象を欠き、視覚性言語表象を中心としているため、視覚口形表象の把握が強く、これが筋肉運動性の発語表象と共に、意味表象に連合して言語表象が成立するものであると論じている。ろう者に直観要素質者が多いのもこうした視覚性表象のためであると。

松沢²⁾氏によれば言語指導には例えば「生活の言語化」は一般的方法に属し、「言語の生活化」は特殊的方法に属する如く、読話にも同様の関係が見られると言う。

又、ろう児の言語指導には失聴の原因、個性、知能、生活環境など個人差の多い関係で、個別診断に基く計画と方法により、個人記録を反省しつつ行うべきであると述べている。

尤も松宮³⁾氏は口話法の困難性を言語観、特に過程的言語観に立脚して説明し、更に手話が普通人の音声言語に近い自然性、必然性を持つものである事を指摘している。

2. 読話と聴話

口唇の動きを見ての言語習得が読話であり、残聴機能を通しての言語習得が聴話である。何れも発語誘起の前段階である。

全ろう教研大会(1953年)で読話向上方策が論じられている中で、神西⁴⁾氏は先ず読話、発語、文章の三者の統一表象と意味の結合、即ち言語表象の確立する迄の時期を五つに分け、読話の難点は視覚上の不足性と不規則性、言語理解上の不便(口形と意味の結合不十分のため)、言語形態の記憶上の困難、会話進行上の不自由(話の端緒が掴みにくい)などであると言う。

又、古沢⁶¹氏は読話指導上、特に留意すべき事項として基礎力の養成を主張し、基礎力の内容を次の如く表示している。

身体的基礎力（視野訓練—瞬間的視覚力、注視力、追視力—触覚訓練、模倣訓練）

知能的基礎力（記憶力、推理力、想像力、理解力、注意力、観察力、批判力）

心理的基礎力（自発的意志表現欲、積極的探求欲）

山中⁶²氏は読話不振の原因を言語学的に体系の不備な事と指導者の心理学的に理論の不確立及び言語の発達段階に就ての研究不足に帰している。

尚、読話によりどの様な形態で、どの程度正しく相手の話を理解して答えるかを判定するために、読話テストが行われ、其の報告が若干見られる。田村⁷⁷氏によれば小学6年から中学2年にかけて読話力は上昇するが、それ以上の学年では職業科に時間を取られるのと文字に頼るようになるため、お話を面倒臭く考えて読話力が伸びない。この、読話テスト成績と思考検査結果との間には可成り高い相関関係が見られると。

又、保育学校におけるリーディング（上野⁸¹氏）や読唇（進藤⁸²氏）の在り方に就ての紹介があり、ろう児がリーディングを始めない時期に読話し理解する語らいを習得せしめなければならないし、又読唇による言語理解には教師はろう児の外に其の親をも指導して行く必要があると言っている。

次に聴話に関する研究として、平本¹⁵¹氏の環境に就ての報告がある。物質的環境を活用し、無形環境である精神的環境を充実する事により、レシーバー使用の欲求力や一挙手一投足への発表力、地方言の聴取力などが向上したと言う。

聴話学級¹⁸¹、聴話教室の開設、補聴器の整備¹⁷¹、聴視一体の指導¹⁹¹（例えば音楽聴取とスライドや紙芝居の上演との結合）などの主張がある。

3. 発 語

読話、読唇を発語に変える過程に就ての解明が困難であるだけに、発語に関する研究は主として発語に役立つと考えられる各種の練習（例えば絵や文字による言葉²⁰¹の練習、呼吸運動の基本練習²¹¹²⁴¹²⁶¹など）に就ての必要性を論じている。

ろう者の発語が音声法を使用しながら彼等自身何ら音声を意識しないため、発語の内容が読話の内容と必ずしも一致しない。即ち発語と読話は直接のつながりを持たないと言う。（関本⁴¹氏）

尚、高野⁴¹氏は視覚によりろう児の心理的リズムを育てて行けば、リズムカルな発語を培う事も不可能でない

だろうと言っている。

又、佐藤²²¹氏により「見えるスピーチ」が紹介され、ろう児への効果が期待されている。

4. 感 覚 訓 練

聴覚に替って発語指導を推進する感覚としては視覚がある。視覚に対する各般の訓練に加えて、触覚、振動感覚、リズム感覚、筋覚、その他温覚、味覚、嗅覚などあらゆる感覚を総動員²⁷¹³⁰¹して訓練すべきである事、又、僅かな残存聴力²⁴¹にも訴えるための練習、並に一般的な身体運動（四肢を使つての運動、発声訓練など）をも考慮する必要のある事などが強調されている。

福岡、坂本²⁸¹氏は玩具を感覚訓練用教材として推奨している。

5. 音 韻

言語指導中、最も多くの研究発表が行われている。其の課題の中心は音韻の明瞭化であり、全ろう教研大会（1952年）でも取挙げている。

明瞭度の判定にはテープコーダーが利用される（堀内³¹¹氏）、（指原³²¹氏）。母音、子音を含めた50音を一音ずつ判定する。殊に子音には破裂、破擦、通鼻、摩擦、弾音などの音区別があり、それらに就て明瞭、稍々明瞭、不明瞭、誤音、無声の5段階に判別分類している。

子音で困難なものとして山形³³¹校はキ、ク、チ、ツの如き各行音列の第二位三位の14種とザ、ガ行を掲げているのに対し、堀田³⁴¹氏はka, saなど第一位を加えて18種を挙げている。

聞えの点では破裂音と鼻音を混同する者が多い（香西³⁵¹氏）。誤音中、へをエと発音する者が25.7%、キをイが25.1%、クをウが22%などを報告している（指原³²¹氏）。

音韻の明瞭化のためには先ず正確な読唇から習熟せしめなければならない（川見³⁶¹氏）。次に発音に対する訓練、環境の静穏、明朗化、発音機能習表や発音、発語のドリルの理解などが指摘されている（川見³⁶¹氏）、（香西³⁵¹氏）、（高橋³⁷¹氏）、（京都³⁸¹ろう校）。

要するに音韻の明瞭化には無理のない、自然の方法で指導する事であると（小倉³⁷¹氏）。

尚、森本⁴¹¹氏はろう教育者の聴覚を研究し、ろう音の最も良い判別能力者は発音する生徒の担任教員であり、最も能力の低いのがろう教育無経験者又は経験の浅い者である事を明らかにしている。

特に佐治³⁸¹氏の語音象徴に関する実験的研究は単に実際面のみならず、言語学、心理学の立場からも批判されるべき興味ある課題である。即ち視覚を始め触覚、嗅覚、味覚に対する語音象徴に就て検討し、其の実験結果によ

れば普通児との間に大差がないので、ろう児に対する口話教育には自然性を尊重する事が大切であると。

6. 語彙と文型

語らいとしての語彙と文型は何れも言語指導の体系の根幹をなすものである。

林⁴³⁾氏は理解語彙と使用語彙、指導語彙と自発語彙又、基本語彙と基礎語彙などに分類し、必要に応じた語彙を集中的に指導する。ろう学校4年間に語彙1600語を習得せしめると。(普通成人の場合は2000語前後を使用している)。

田中⁴⁴⁾氏は50音別分類による基礎語彙六段階配当表を、又、大島⁴⁵⁾氏は写真カードによる語彙拡充を試みた。一枚のカードに数種以上の言語が記載してある。特に学業不振児には名詞と動詞を重点的に指導し効果を挙げている。

高田⁴⁶⁾氏は理解語彙と発表語彙及び共通語彙を挙げており、語彙を語らいとして単語的に教えるのではなく、文型として与える事が大切だと述べている。

満6才で入学したろう児に8年間学習せしめるための学年別語彙配当表を松村⁴⁷⁾氏が提示している。

語らい文型に就ても各ろう校案出の分類表が見られる。

本多⁴⁸⁾氏は助詞が軽視される傾向に在るので特に「てにをは」を指導要素にしているが、田中⁴⁴⁾氏は徒らに文法的形式にとらわれる事は反って不自然な形になると述べている。

7. 考 察

言語指導がろう教育の中核であるだけに、これに関する研究発表は活潑であるが、課題は新しい発展を見せていないと言うのが現状でなかろうか。

蓋し言語が聴覚を通して最も確実且、円滑に発達するものでありながら、ろう者には其の門戸が閉ざされているため、全く直接的な連関の一段低い他の感覚、殊に視覚に依存しなければならない事は、いつ迄も残されて行く悩みであり課題であるわけである。

この困難な道を切り開くためには、先ず普通人からの正しい発語の口形、唇動を読み取らしめるよう努めなければならない事であり、而も乳幼児の幼小な時期からそうした注意を特に家庭において守る事が大切である。この点ろう児を持つ家庭の保護者や家族の人々に正しい発語による読話の在り方を理解せしむべきである。

更にろう教育の義務制を小学以前の幼児期に迄押し進める事も考慮されなければならない。

これを要するにろう児に対しては我々の発語を正しくし、この正しい発語から正しい読話を習得せしめ、正しい読話から又、正しい発語を導き出す事である。

従って直接ろう教育に携る人々は常に正しい発語者でなければならない。この点、医学、心理、教育その他言語学に関係ある専門家を網羅してろう言語研究所を設け、これらろう教育に携る人々に正しい言語教育を行い、又研究援助をする事のできる機関の設立が望まれる。

又、残聴能力者を一日でも早く発見する事が大切であり、これにより補聴器その他感覚刺激による聴力の再成に全力を尽すべきである事は言う迄もない。

尚、「語らい語彙・文型」と「書く語彙・文型」との関連性を更に深く追求解明する事は、ろう教育に必要な課題と考える。

主な参考文献課題

1. ろう語の本質について (根岸)
2. 言語指導における一般的方法と特殊的方法 (松沢)
3. 言語過程観と口話法の立場 (松宮)
4. 言語指導上における一考察 (関本), (高野)
5. 言語指導体系作成について (大津)
6. 読話成績向上方策 (神西), (古沢), (山中)
7. 読話の一考察 (田村)
8. 保育学校におけるリーディング (上野)
9. 保育学校における読唇 (ラスマン, 遠藤訳)
10. 3才以下のろう児の家庭指導 (上野)
11. 読話語の設定と読話力向上について (佐間野)
12. 基礎的な諸問題の検討とその改善点 (始閣)
13. 読話成績向上の一拠点 (高田), (島)
14. 読話テストにおける文章表現の誤りとその対策 (関谷)
15. 聴話教育の環境について (平本)
16. 聴話教育の可能性と其の限界 (細田)
17. 聴話教育の実際 (山田)
18. 聴話学級編成とその発展 (仲谷)
19. 聴話指導の一分野 (橋爪)
20. ろう学校におけることばの練習のいろいろ (広岡)
21. ろう児言語指導に関する主要な科学的研究の成果と指導上の参考意見 (川本)
22. 見えるスピーチについて (佐藤)
23. 発語指導について (京都ろう校)
24. 発語指導 (附・残存聴力の利用) (鳥居)
25. 発語能力の診断 (森田)
26. 朝礼時実施する発語基本練習要綱 (京都ろう校)
27. 感覚訓練について (玉井)
28. 感覚訓練の来し方、行くえ (福岡・坂本)
29. 手製の感覚訓練の材料 (マグドナルド, 大塚訳)
30. 発語指導はどのように行ったらよいか (藤森, 大橋,

- 馬場)
31. 五十音の発音の明瞭度に関する調査 (堀内)
 32. 言語指導上における音韻の明瞭化について (指原)
(高橋) (柴田) (三玉)
 33. 音韻指導のあゆみ (山形ろう校)
 34. 言語指導上における困難な音韻の指導 (堀田)
 35. 音韻指導における音韻の明朗化 (通鼻音について)
(香西) (京都ろう校)
 36. 低学年における言語指導 (発音の明瞭化について) の
体験 (川見)
 37. 入学四年目における音韻調査と反省 (小倉)
 38. 語音象徴に関する実験的研究 (佐治)
 39. 発音テキスト (大阪市ろう校)
 40. 基本語らい表 (京都ろう校)
 41. ろう児の発音とろう教育者の聴覚の研究 (森本)
 42. 私の経験した誤音矯正 (山田)
 43. 語彙についての諸問題 (林)
 44. 文型についての一考察 (田中)
 45. 写真カードによる語彙拡充 (大島)
 46. 語彙拡充の一断面 (高田)
 47. 言語理解と助詞指導 (本多)
 48. 学年別語彙配当表 (松村)
 49. ろう学校低学年の文型 (佐藤)
- (1958 年 6 月 30 日) [未完]
[児童学講座]